

THE KŌHŌ NANKOKU

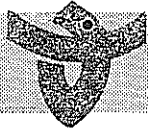
第53号

昭和39年3月20日

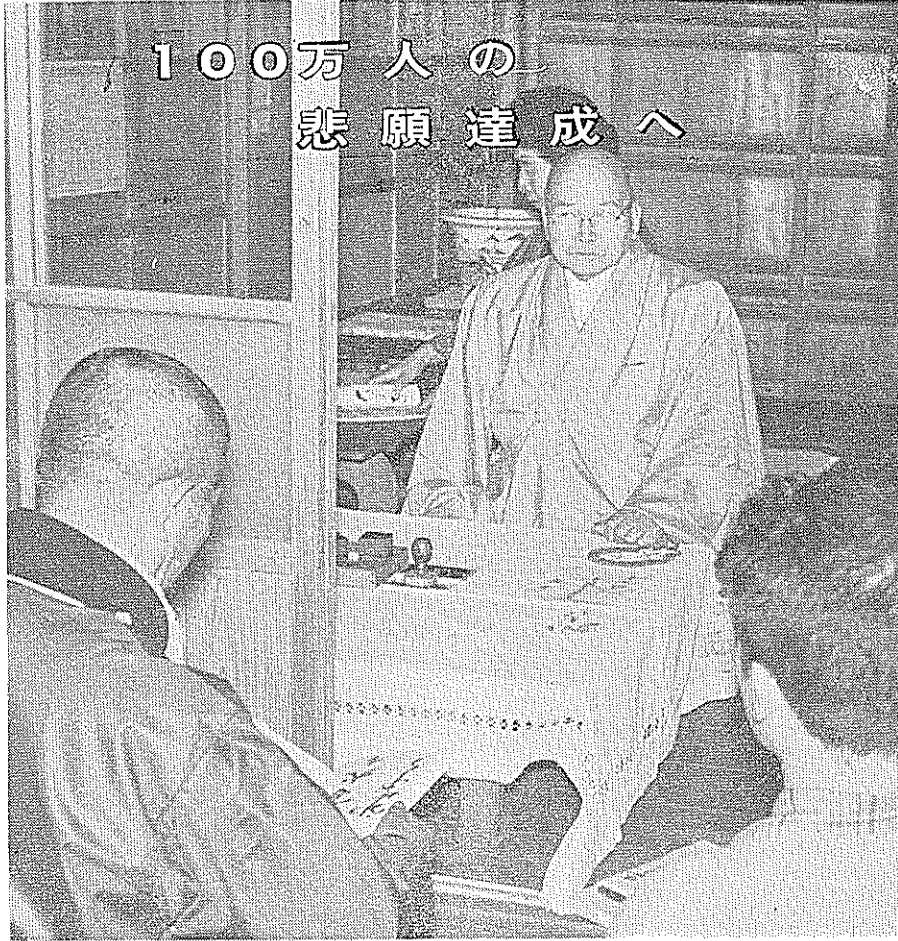
編集発行  
南国市広報委員会

事務所  
高知県南国市役所内  
(電 2111)

刷 印川北印刷株式会社  
(電 2379)



# 広報 南国



## 100万人の 悲願達成へ

### 市長 和尚となるの記

ここ二十九番の札所園分寺にも春のおとずれとともにお辺路さんが増えてきた。

お辺路さんのみでなく観光客もぼつりぼつりと姿を見せ、仏心に触れてゆく、百万人の観光の悲願を目指して県は力を結集している。観光も時代の脚光を浴びた重要産業の一つ、風寒きある日の園分寺に、和尚ならぬ和尚が出現（本尊千手観音もおっかなびっくり）、

わがもの顔で納経の筆を走らせていた。

これも観光への一役をになって、よく似合う？僧衣に身をゆだねた、池川市長一日任職の姿であった。



ことはオリンピックの年である。國を上げて世界の人々をあたたく迎え、やさしく接して日本のよきを満喫させたいものだ。しかし、どうも日本人は熱しやすく、さめやすい国民性が強く、せっかくの国土美化運動や、環境設備の改善においても、オリンピックまではどこまでも美しく、よりよき設備に全力をつくし、その後はさっぱりということにならぬようにしたいものだ。そのようなみかけの美しさも大切であるが、より大切なものに心の美しさがある。花を愛して九十年と植物に精魂をうちこんだかの牧野博士は、人間は植物があるから生きられていくといわれていた。この世に植物がなくなれば米や、パンも決してできない。道ばたに美しく咲いている草木を、取ってはならない天然記念物でさえ、己が一人の愛のため根こそぎに持ち去る人々もいる。これではなにが自然の美しさなのかわかったものでは無い。自然に生まれ、育つてこそ本当の美しさがある。そのことを忘れては、美しい庭も心のない庭といえる。一人よがりの根性を捨てみんながたのしみ心を養えないものか。聖火の走る道を美しくいもどる花一ぱい運動も、ただうわべばかりの掛け声でなくみんなの心の奥底からの花いっぱいでありたいものだ。

若やぎし

心花まく老二人